

多摩考古学研究会総会記念講演2007年 資料

『日本の考古学に貢献した欧米人達』

—欧米人たちによる日本の考古学—

(未完成、2007年7月現在)

キーリC. T.

2007年（平成19年）7月14日

発表資料

June 27, 2007

日本の考古学に貢献した欧米人達

—欧米人たちによる日本の考古学—

はじめに

日本の考古学を研究したり、日本の考古学に貢献したりする外国人がいるのは、皆が知っていると思う。特に、モースのことを知らない人はいないはず。しかし、その外国人の研究者の数や彼らの研究活動の内容を詳しく知っている人はいないと思う。

モースの『大森貝塚』（明治12年[1879]）が刊行された数10年前から現代まで、日本の考古学に直接的に、または間接的に、大いに貢献した人々から一通の論文しかだしていない人々まで、欧米人研究者だけの数は少なくとも100人まで上る。もちろん、韓国・朝鮮人と中国人やアジア人とアフリカ人の研究者がいるが、彼らは別の話し。

この欧米人研究者の種類は：

- ・考古学者
 - ・日本の考古学を主に研究する人々
 - ・日本の考古学を含めるが他の地域を主に研究する人々
 - ・日本の考古学と他の地域の考古学をほぼ同じ程度に研究する人々
- ・他の学者
 - ・自然・形態人類学者
 - ・自然科学者
 - ・言語学者
 - ・その他の学者
- ・日本の考古学に関係ないが、それでも日本の考古学にかなりの影響を与えた学者（例：V. G. Childe）
- ・その他の人々（今日の話に入らない）
 - ・日本の考古学の成果を別の地域や分野の研究のために使う人々
 - ・日本の考古学のことを少し知りたい人々
 - ・その他の人々

この欧米人研究者達の日本の考古学への貢献は（1）日本の考古学やその成果を外国に伝えること（「外へ」の貢献）、（2）外国の考古学を日本の考古学に伝えること（「内へ」の貢献）。（1）は外国で論文や本をだしたり学校で教えたりする人々。（2）は日本語で論文をだしたり日本で調査を行ったりする人々。

| その歴史の区分： | 戦前 | 戦後 |
|----------|-----------------|-------------------------|
| | 江戸後期（1823～1867） | 昭和20年代（1945～1954） |
| | 明治時代（1868～1911） | 昭和30年代（1955～1964） |
| | 大正時代（1912～1925） | 昭和40、50、60年代（1965～1988） |
| | 昭和前期（1926～1945） | 平成年代（1989～2007） |

=====

I. 戦前の人々（開拓して基盤を作った人達）：

- ・重要人物：Siebold(父), Morse, Milne, Seibold (子), Gowland, Hitchcock, Munro
- ・その他の人物：Thomsen, Lubbock, Morgan, Engels, Aston, Chamberlain,

Whymant, Batchelor

（重要人物）戦前、7人の欧米人が日本の考古学に貢献した。この7人は、日本考古学の開拓者でもあり、その基盤を作った人達でもある。しかし、考古学者ではなかった。医師（2人）、生物学者（1人）、地震学者（1人）、冶金学者（1人）、顕微鏡部長（1人）、外交官（1人）であった。国籍はドイツ（2人）、アメリカ（2人）、イギリス（2人）、スコットランド（1人）。

Philipp Franz von Siebold（父）は江戸後期に来日し、全9冊におよぶ本『日本』を執筆し

た。この本は初めて日本の考古学を外国に紹介した。その後、明治12年（1879）にEdward S. Morseは『大森貝塚』を出版し、John Milneは札幌と小樽から出土した石器に関する論文を執筆し、そしてHeinrich von Siebold（子）は『日本の考古学、特に石器時代、に関する若干のことば』（あるいは『日本考古学覚書』）を出版した。William Gowlandは明治5年から21年（1872~1888）まで在日、古墳をよく研究した。明治19年から21年（1886~1888）までRomyn Hitchcockと一緒にその研究を深めた。帰国（イギリス、アメリカ）後、2人とも古墳文化に関する論文を執筆した。

最近、GowlandとHitchcockに関する興味が増している。この2人が古墳文化の研究にかなり貢献したが、日本の考古学研究の歴史の間に殆ど見えない人間に成っていた。そのところで、朝日新聞社がGowlandに、財団法人檀原考古学協会がHitchcockに関する本を出版し、讀賣新聞などの新聞がGowlandとHitchcockの記事を掲載し、そして今年6月に（2週間前まで）、明治大学がGowlandの特別展を行った。

- ・片岡正人 2007 「古墳研究 無名米国人の業績」『讀賣新聞』（歴史）、3月16日、27頁。
- ・讀賣新聞 2007 「明治期 写真で古墳の記録、ガウランドの業績紹介」『讀賣新聞』（歴史）、6月1日、27頁。
- ・朝日新聞社 2003 『ガウランド 日本考古学の父』。
- ・上田宏範、松江信一、ほか（編集） 2006 『ロマイン・ヒッチコックー滞日二か年の足跡』財団法人檀原考古学協会。
- ・明治大学博物館2007年度春季特別展「ガウランド 日本考古学の父」2007.5.19 SAT-7.1 SUN。

これは日本の場合。欧米でGowlandの論文が昭和50年代にも引用された。

七人目のNeil G. Munroは、本業は医師、明治25年（1892）に来日し、医者として昭和17年（1942）の死まで日本に住んでいた。Munroが執筆したPrehistoric Japan（『先史時代の日本』、明治41年[1908]）は、英語で書かれた最初の日本の先史時代の「教科書」であると思う。内容は、第1章 旧石器時代の遺物、第2章 新石器時代の遺跡、第3章 住居、第4章 器具と生活用具など第15章まで非常に詳しい。学生の時代に、私はこの本を読んだ。

大正時代には、MorseとMunroがまだ活動していたが、昭和前期、日本の考古学界には欧米人一人も活躍していなかった。（Munroの最後の出版物は、死後1962（昭和47年）に出版された『アイヌの信仰と崇拜』（AINU Creed and Cult）だった。）

この7人に関する詳しい説明は以下の文献を参照：

- ・齊藤忠『考古学史の人びと』東京：第一書房、昭和60年。
- ・朝日新聞社（編集）『日本史人物事典』東京：朝日新聞社、1994。

（その他の人物）戦前、日本の考古学に間接的に貢献した数人の欧米人もいた。Thomsen（天保7年）とLubbock（慶応元年）が考古学の時期分類の基礎を使った。Morgan（明治10年）とEngels（明治17・24年）が考古学の理論・解説論の基礎を作った。このMorganとEngelsの考え方がMarxismの理論基礎となり、戦後には、MarxismはChildeの考え方に影響を及ぼした。それで、Childeの本が日本語に訳され、日本の考古学の考え方に影響を及ぼした。

古墳時代の研究に必要な不可欠の文献である『日本書紀』と『古事記』は、Aston（明治12年）

が『日本書紀』、Chamberlain（明治20年）が『古事記』を英訳した。Whyman（大正15年）が日本語・日本民族の海洋起源論を主張し、Batchelor（昭和2年）がアイヌ文化の研究に役立つ英文の本を出版した。

●（江戸後期 [1823~1867]）

1. Philipp Franz Balthasar von Siebold（寛政8年～慶応2年 [1796~1866]）

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト

国籍：ドイツ、本職：医師、在日期間：文政6年～文政12年、安政6年～文久2年（1823~1829, 1859~1862）

貢献：『日本』（全9冊）と言う本を、天保3年から嘉永4年まで（1832~1851）出版した。内容は日本の歴史、地理、言語、動植物など、各分野にわたって日本を外国に紹介した。日本の考古学を始めて外国に紹介した人である。

●（明治時代 [1868~1911]）

2. Edward Sylvester Morse（天保9年～大正14年 [1838~1925]）

エドワード・シルベスター・モース（モールス）

国籍：アメリカ、本職：生物学者、在日期間：明治10年～12年、明治15年（1877~1879, 1882）

貢献：大森貝塚の発掘と和英の報告書、日本の最初の学術的発掘調査。旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代の分類を日本の学者に紹介した。

3. John Milne（嘉永3年～大正2年 [1850~1913]）

国籍：イギリス、本職：地震学者、在日期間：明治9年～27年（1876~1894）

その他：函館出身の堀川トネと結婚、Milneが亡くなって彼女は故郷に戻った。

貢献：石器時代の住居址はアイヌのもの。

4. Heinrich Philipp von Siebold（嘉永5年～明治41年 [1852~1908]）

国籍：ドイツ、本職：外交官、在日期間：明治2年、7年～12年、20年～22年（1869, 1874~1879, 1887~1889）

貢献：日本の石器文化とアイヌ文化をドイツに紹介した。

5. William Gowland（天保13年～大正11年 [1842~1922]）

国籍：イギリス、本職：冶金技師、在日期間：明治5年～21年（1872~1888）

貢献：福島県から宮城県まで406基の古墳を踏査した。

6. Romyn Hitchcock（嘉永4年～大正12年 [1851~1923]）

国籍：アメリカ、本職：米国国立博物館の顕微鏡部長（Smithsonian Institution）、在日期間：明治19年～21年（1886~1888）

貢献：2年間、Gowlandと一緒に古墳の調査した。

7. Neil Gordon Munro（文久3年～昭和17年 [1863~1942]）

国籍：スコットランド、本職：医者、在日期間：明治25年～昭和17年（1892~1942）

その他：Munroの婦人の名はチョ・マンロ。住まいは、横浜から軽井沢、軽井沢から昭和5年に北海道に移った。

貢献：日本の考古学・先史時代を英語で紹介し、『先史時代の日本』のような「教科書」を出版した。アイヌの研究にも貢献した。

● (大正時代 [1912~1925])

1. Morse 『日本その日その日』大正6年 (1917) (滞在記)
2. Munro 「大和のドルメン時代」大正6年 (1917) (日本アジア協会での講演)、
遺稿集：『アイヌ信仰と崇拜』(昭和47年)出版 (AINU Creed and Cult [1962])。

● (昭和前期 [1926~1945])

沈滞・沈静な時代

● (その他の人達、天保7年~昭和20年 [1836~1945])

1. Christian J. Thomsen (天保7年[1836]) (デンマーク)
貢献：石器時代、青銅器時代、鉄器時代の先史時代分類。
2. John Lubbock (慶応元年、明治3年 [1865, 1870]) (イギリス)
貢献：旧石器時代と新石器時代の石器時代の分類と旧石器時代は洪積世。
3. Lewis Henry Morgan (明治10年 [1877]) (アメリカ)
貢献：文化の進行の分類は野蛮状態、未開状態、文明。これはEngelsとMarxの理論の基礎になった。
4. Frederick Engels (明治17年、24年 [1884/1891]) (イギリス)
貢献：『家族と私有資産と国家の起源』でMarxism理論の最初の纏めになった。
5. W. G. Aston (明治12年 [1879]) (William George) (イギリス)
貢献：『日本書紀』の英訳。
6. Basil H. Chamberlain (明治20年 [1887]) (イギリス) (1850~1935)
来日：明治6年 (1873)、海軍兵学校と東京帝国大学で教えた。アイヌ語も研究し、『アイヌ昔話』(Aino Fairy Tales)を翻訳した。
貢献：『古事記』の英訳 (参照：Philippi 昭和43年 [1968])。
7. A. N. Whyman (大正15年・昭和元年 [1926]) (国籍?)
貢献：「日本語・日本人の海洋起源理論」Transactions of the Asiatic Society of Japan (2nd series), 3: 15-81。
8. John Batchelor (昭和2年 [1927]) (イギリス)
貢献：『アイヌの生活と知識』で英語圏のアイヌ文化研究に貢献した。

=====
=====
II. 戦後の人々 (昭和20年代、復活させた人達) :

- ・重要人物：Groot, Maringer
- ・特記・特役人物：MacCord
- ・その他の人物：

(重要人物) 戦後間もなく3人の欧米人は、欧米人の日本の考古学にの貢献することを復活させた。GrootとMaringerは研究者だったが、MacCordはアメリカ陸軍の少佐だった。この3人に書かれた本や論文の数が少ないが、重要なものである。

Gerard J. Grootは、日本の先史時代を詳しく説明する本を出版し、姥山貝塚を発掘し報告書をY. H. Sinotoと一緒に書いた。Grootが出版したThe Prehistory of Japan (『日本の先史時代』、昭和26年[1951])と言う本は、Munroが執筆したPrehistoric Japan (『先史時代の日本』、明治41年[1908])に次いで、英語で書かれた第2の日本の先史時代の「教科書」である。しかし、Grootの本の内容が、Munroの本のと違って、縄文時代のことしか触れていない。

Johannes Maringerは、日本の旧石器文化に関する5通の論文を外国の学術雑誌に掲載した。Maringerはモンゴルや東南アジアの旧石器文化の研究にも関わっていた。

(特役人物) Howard A. MacCordのことは、後の「VIII. 在日米軍基地内」で説明する。

● (重要人物)

1. Gerard J. Groot (昭和26年、昭和27年)

国籍：ベルギー (?)

貢献：戦後間もなく日本の考古学を世界に紹介した。

出版物：『日本の先史時代』1951、『姥山貝塚』1952 (共：Yosihiko H. Sinoto)

2. Johannes Maringer (d. 1981) (昭和28年～昭和32年)

国籍：ドイツ (?)

貢献：日本の旧石器時代に関する5通の論文を英語・ドイツ語で発表した。

出版物：「日本の旧石器時代」1953、「権現山を出土したハンド・アクスおよび日本における旧石器の問題」1956、「中部地方における旧石器の石核と剥片文化」1956、「中部地方から出土した東南アジアのホアビン文化前期に類似する若干の石器」1957、「中部地方から出土した東南アジアのパトジニアン伝統に類似する石器文化」1957

● (特記・特役人物)

3. Howard A. MacCord (後の話し：VIII. 在日米軍基地内)

=====
=====
III. 戦後の人々 (昭和30年代～、再開拓した人達) :

- ・重要人物：Kidder, Ikawa-Smith, Pearson
- ・新開拓者：Chard, Mohr, Sample, Morlan
- ・特記・特役人物：Childe
- ・その他の人物：Beardsley

(重要人物) 昭和30年代に、Kidder、Ikawa-SmithとPearsonの3人が、欧米の考古学界に日本考古学研究を再開拓した。この3人とも、まだ現役である。研究方法や理論は一般的、主流であるが、出版物が多い、内容が殆ど、または半分くらい、日本の考古学に直接触れている。

J. Edward Kidder, Jr.先生は、昭和27年(1952)ごろから日本の縄文土器の研究し、昭和28~29年に京都大学文学部でフルブライト奨学生として日本の古美術と考古学を勉強した。昭和30年、博士号をえて、昭和31年(1956)から平成5年(1993)の定年退職まで37年間、東京都にある国際基督教大学で日本考古学と美術を教えた。数多く本や論文、講演で日本の考古学を広く外国に紹介した。代表的な出版物は、『仏教前の日本』(1959)、『古代日本の美術、偉大な古墳とその宝物』(1964)、『日本の寺院』(1964)、『日本先史時代の美術、縄文土器』(1968)、『仏教前期の日本』(1972)、『古法隆寺とその時代』(1999)、『卑弥呼と邪馬台国とその謎』(2007)。昭和40年代から平成5年まで(1968ごろから1993まで)大学構内の遺跡の発掘調査を行い、小金井市とその周辺の野川流域の発掘調査の団長として小山修三、白石浩之、小田静夫他の日本人考古学者の研究・発掘調査を支えて、その調査報告書の編集も手伝って数多くの報告書も出版した。Kidder先生のJapan before Buddhism (『仏教前の日本』、昭和34年 [1959]) は、ドイツ語、イタリア語、スウェーデン語、ポルトガル語に翻訳され、Grootが出版したThe Prehistory of Japan (『日本の先史時代』、昭和26年[1951]) と

Munroが出版したPrehistoric Japan (『先史時代之日本』、明治41年[1908])に続いて、英語で書かれた第3の日本の先史時代の「教科書」と言える。ちなみに、85歳の今年でも、まだまだ元気で日本の考古学に貢献している。

Fumiko Ikawa-Smithは、昭和28年(1953)まで日本で勉強したが、修士号・博士号はアメリカの大学で得て、カナダのMcGill大学で考古学の先生として退職(?)まで勤めた。彼女が書いた本や論文が多い、殆どは日本の旧石器時代を論議しているが、時々縄文か他のことも論議する。芹沢長介先生の前期旧石器の考えをよく外国の学術雑誌に掲載した。平成10年ごろからIkawa-Smithは、性別意識(ジェンダー)や国家像・国家意識(national identity)に関する論文を書いたり学会で発表したりしている(参照:下のV、平成時代)。そして、平成14年(2004)、アメリカの考古学協会(Society for American Archaeology)の第69回年次総会で日本の前期旧石器捏造問題のシンポジウムを担当した。参加者は5人の日本人と3人の欧米人(小林達雄、小野昭、矢島國雄、佐川正敏、白石浩之、Fumiko Ikawa-Smith、Gina Barnes、Peter Bleed)。Ikawa-Smithまだ活発的に活躍している。

Richard J. Pearsonは、昭和37年(1962)ごろから東アジアの考古学を研究してる。彼が特に沖縄の先史時代の研究に活躍している。彼のArchaeology of the Ryukyu Islands (『琉球列島の考古学』、昭和44年[1969])が、英語圏には基礎的な本である。しかし、Pearsonの研究が台湾から日本、韓国も、東アジアの広い地域を駆け回っている。太平洋の島までも。Pearsonの勤務先は、昭和46年(1971)までアメリカのUniversity of Hawaii、その後、定年退職まで、カナダのUniversity of British Columbiaで考古学を教えた。最近、『国際縄文協会紀要』第1号(2004)の編集者として勤めた。69歳で、この3人「昭和30年代からの再開拓した人達」の中で一番若い、まだ元気で活躍している。

(新開拓者)昭和30年代後半から40年代にかけて新しい流れが現れた。これは「新開拓」の活動と言えると思う。この新開拓活動が、アメリカの1960年代のいわゆるニュー・アーケオロジーの方法と理論を用いて日本の考古学の研究を行ない、日本人考古学者と共に現地で発掘調査・研究を行った。この新しい流れを促したのは、アメリカのウィスコンソン大学(University of Wisconsin)のChester S. Chard博士だった。Chard博士が昭和30年代、40年代に東北アジアの考古学にかなりの興味を持っていた。そのために、博士が学生に頼んでロシア、中国、日本の考古学関連の本や雑誌の論文を翻訳してもらって、学生がその国々に研究できるようにした。博士が、それとともに、日本の若手の考古学者をウィスコンソン大学に招いた。例えば、小林達雄、吉崎昌一、小谷義信、林謙作、北海道の岡田夫婦(岡田淳子)、別府晴美、大場利夫など。Chard博士が最初日本に送った学生は、Albert MohrとRichard Morlanだった。(同じ時にMohrの奥さんLillie Sampleを韓国に送った。)アジアの考古学をもっと広く伝えるために、Chard博士がArctic Anthropology (『北極圏の人類学』)という学術雑誌を昭和44年(1969)に創立した。

Albert Donald Mohrは、昭和40年代で九州の縄文文化に関する博士論文と一通の学術雑誌に掲載した論文(共筆は吉崎昌一)しかださなかった。その後、闇に消えた。

Lillie Laetitia Sampleは、同じく昭和40年代に韓国の縄文と同時期の文化に関する論文3通と韓国・九州に関する論文1通しかださなかった。その後、闇に消えた。

Richard E. Morlanも、昭和40年代に北海道の旧石器文化の研究し、特に、クサビ型石核に関する論文を執筆した。その後、カナダのCanadian Museum of Civilizationに就職して、かなり

の有名な考古学者になった。業績が山ほどある。しかし、日本考古学の研究を続かなかった。残念なこと、今年1月で66歳の若さでこの世を去った。

この第一波Chard博士の学生たちは、日本の考古学研究を続かなかったが、第二波の学生たち（下のIV、昭和40年代～）が今でも活躍している。ちなみに、ウィスコンソン大学で勉強した若手の日本人考古学者たちが今日の日本考古学界の元老として活躍している。Chard博士の日本考古学への影響・貢献が少なくない。

（特役人物）V. Gordon Childeは、世界の考古学界には非常に有名な人物。今でも考古学専攻の学生が彼の本を読まなければならない。この必要性は、日本の学生も同じ、Childeが書いた本も日本語に翻訳されている。だから、Childeの考え方は日本の考古学に影響を及ぼした。今でも、影響を及ぼしているかも知らない。

（その他の人物）R. K. Beardsleyのことは、私はよく知らないが、歴史学者だと思う。日本の考古学について一通の論文しか知らない、昭和36年（1961）に国際学会の発表記録に掲載された「考古学・民俗学・歴史から見た日本の新石器文化について一解説」。

- （重要人物）

1. J. Edward Kidder, Jr.（昭和28年～）

国籍：アメリカ、在日期間：1956~1993（昭和31年～平成5年）、所属機構：国際基督教大学（東京）、専攻：日本の美術と考古学（大学教授）

その他：1953-1954, 京都大学文学部でフルブライト奨学生として研究し、1955年に博士号（New York University）、1992日本国政府より勲三等瑞宝章を受ける（くんさんとうずいほうしょう、Order of the Sacred Treasure）。

貢献：日本の考古学・古代美術を、数多くの本や論文、講演で日本の考古学を広く外国に紹介した。また、先生や指導者として小山修三、白石浩之、小田静夫他の日本人考古学者の研究・発掘調査を支えた。

出版物（参照：参考資料）：

2. Fumiko Ikawa-Smith（その1）（昭和32年～）

国籍：日本、カナダ、所属機構：McGill University（カナダ）、人類学部、専攻：日本の考古学、特に日本の旧石器時代

貢献：日本の旧石器文化とその研究の諸問題を広く外国に紹介した。半世紀以上、今日まで活発的に活躍している。

出版物（参照：参考資料）：

3. Richard J. Pearson（昭和37年～）

国籍：カナダ、所属機構：University of Hawaii ~1971（アメリカ）人類学部、University of British Columbia, 1971~定年退職（カナダ）人類学部、専攻：東亜の考古学、特に日本・沖縄の考古学

貢献：特に、沖縄・琉球列島の考古学を英文の本や論文でよく外国に紹介した。

出版物（参照：参考資料）：

- （新開拓者）

1. Chester S. Chard博士（昭和30、40年代 [1960s]）

国籍：アメリカ、所属機構：Department of Anthropology, University of Wisconsin、研

究：昭和32～49年[1957～1974]の間に東北アジアの考古学に関する論文、昭和35～47年[1960～1972]の間に日本の考古学に関する論文、Arctic Anthropology（『北極圏の人類学』）という学術雑誌を昭和44年（1969）に創立した。

2. Albert Donald Mohr (昭和37年～48年 [1962～1973])

国籍：（？）、博士号：昭和42年（1968）University of Wisconsin、研究：九州の縄文文化。Chard博士と吉崎昌一先生のもとで勉強した。

3. Lillie Laetitia Sample (昭和41年～53年 [1966～1978])

国籍：（？）、博士号：昭和41年（1967）University of Wisconsin、研究：韓国の東山洞貝塚・韓国の先史時代。Chard博士のもと、Mohrさんと一緒に勉強した。

4. 故Richard E. Morlan (1941-2007) (昭和41～53年 [1966～1978])

国籍：カナダ、博士号：昭和46年（1971）University of Wisconsin、所属機構：Archaeological Survey of Canada of the Canadian Museum of Civilization、研究：北海道の先土器時代、縄文時代。

● (特役人物)

1. V. Gordon Childe (昭和23～39年[1948～1964])

出版物：

- ・ What Happened in History. (昭和23年 [1948])
- ・ Man Makes Himself. (昭和26年 [1951]) (transl. Nezu M. 『文明の起源』 Iwanami Shoten)
- ・ Social Evolution. (昭和26年 [1951])
- ・ History. (昭和29年 [1954]) (transl. Nezu M. 『歴史学入門』 Iwanami Shoten)
- ・ What Happened in Prehistory. (昭和33年 [1958]) (transl. Imaki R. and Muto K. 『歴史のあけぼの』 Iwanami Shoten)
- ・ Piecing Together the Past. (昭和39年 [1964]) (transl. Kondo Y. 『考古学の方法』 Kawade Shobo)

● (その他の人物)

1. R. K. Beardsley (昭和36年[1961])

出版物：日本の考古学について一通の論文。

=====
=====
IV. 戦後の人々（昭和40年代～、研究を深めた人達）：

- ・ 重要人物（先輩達）：Hurley, Bleed, Crawford, Barnes
- ・ 重要人物（後輩達）：D'Andrea, Bennett, Savage, Stimmel, Matsui, Weymouth
- ・ 特記・特役人物：Aikens, Chisholm
- ・ 幻人物：Stewart
- ・ 特殊人物：Meggers
- ・ その他の人物：Anderson, Reynolds, Derevyanko, Ledyard, Shutler, Solheim
- ・ 一回切り人物：Andrefsky, Green, Grigorenko, Hawkes, Hitchins, Hoffman, Hughes, Kiley, Larichev, Roksandic, Rouse, Rowley-Conway, Scarre, Yen, Young, Vasil'evskii

（重要人物：先輩達）昭和40年代後半～50年代前半、Chard博士の支援を受けた重要な4人の欧米研究者が日本考古学の舞台に現われ始めた。この4人はChard博士の第2波の日本考古学への

影響。博士号を得た順番には、Hurley、Bleed、CrawfordとBarnes。Hurleyは既に故人だが、他の3人はまだ現役の研究者・教員として活躍している。HurleyとBleedがChard博士（University of Wisconsin）の大学院生だった。Crawfordが大学の時でHurley先生の学生で、大学院で別な大学に入ったが、続いてHurley先生と一緒に北海道の遺跡調査に参加した。BarnesがHurley・Bleed・Crawfordとの知り合い・学会での付き合いの関係で、それで彼女もChard博士の支援・影響を間接的に受けた。

昭和40年代は、アメリカの考古学界にとって革命の時であった。若い考古学者が考古学研究を人文科目（科学）から自然科学のような学問に移そうとしていたから。別な言い方は、理論を立てる方法を類似方法より自然科学方法を使おうとした。または、人文科学のような「柔らかい」学問から自然科学のような「硬い」学問にしたかった。なるべく説明の曖昧さを少なくすること。Hurley、Bleed、CrawfordとBarnesと彼らの後輩たちが、このいわゆるニュー・アーケオロジーの影響を受けた。だから、彼らの考古学方法を理解するために、この影響を考えなければならない。

William M. Hurleyは、アメリカの中西部の考古学の専門、特にWisconsin州の考古学に詳しい。が彼は綱・縄・紐に興味をもって研究していった。大学院の時の同級生には、Chard博士が招いた日本人が数人がいった。それで縄文土器のことを知り、縄文の縄（chords）も研究しはじめた。そこでYoshizaki Masakazu（吉崎昌一）先生の招待で北海道のハマナスノ遺跡の調査に参加した。その続きで北海道の八木遺跡の発掘調査を行った。

Peter Bleedは、Hurleyとほぼ同級生で、Chard博士の影響を受け、博士論文の研究は、東北大学の芹沢長介先生のもとで行った。博士論文の題名は「日本の東北南部の縄文中期の文化編年」。その後、Hurleyと一緒に、団長として八木遺跡の調査を行った。Bleedの日本考古学に関する研究論文は、八木遺跡、北海道縄文の生活方式、石器技術、大分県早水台遺跡出土前期旧石器の信憑性、など。最後まで宮城県の前期旧石器を信じていった。

Gary Crawfordは、カナダのUniversity of Torontoの大学生の時、自然科学の専攻だったが、Hurley先生の授業を受け、その「素晴らしい先生」の影響で考古学における自然科学の道を歩み始めた。特に、古民族植物学の専門になった。1974年、Hurley先生の招待でハマナスノ遺跡の調査に参加し、その後、他の遺跡の調査にも参加した。Crawfordが特に力を入れているのは、細かい植物遺体を探すための水浮上選別技法（water flotation）である。これもHurley先生の影響。Crawfordの博士論文は、北海道の「亀田半島における縄文の古民族植物学」（1983年に単行本として発行された）。

ここで2人の日本人のことを少し説明しなければならない。1人はHurleyのUniversity of Wisconsinの同級生、もう1人はHurley先生の学生。小谷義信（Kotani Yoshinobu）が博士論文の研究で熊本県上の原遺跡（うえのはる）の調査に参加し、アメリカで始まった水浮上選別技法（water flotation; Struever 1968, American Antiquity）を用いて細かい植物遺体を採集した（小谷『人類学雑誌』1972）。小谷さんの良い結果は、Hurleyが知っていたから、彼がCrawfordがハマナスノ遺跡の調査に参加できるようにした。その頃、森美智子（Chiura-Mori Michiko）はUniversity of Torontoの大学生でHurley先生のもとで勉強していた。彼女が日本に帰国して、小田静夫さんが担当していた遺跡の調査に参加し、水浮上選別技法を用いた。その後、彼女が鳥浜遺跡などで糞化石を採集し、縄文人の植物食生活を直接研究した。間接的だが、ChiuraさんがChard博士の影響を受けて欧米の考古学方法を日本の考古学界に広く宣伝し

た。

Gina Lee Barnesは、Crawfordと同じ時で博士論文の研究のために来日。しかし、彼女の研究は弥生時代から古墳時代の転換期で、関西の奈良盆地で行われた。大学も違っていた。それでも、2人は一緒に行動した時もあった。博士論文は「奈良盆地における弥生・古墳の遺跡地理的分布の考古学」（1988年に単行本Protohistoric Yamato: Archaeology of the First Japanese State（『古墳時代の和—日本における最古の国家の考古学』）として発行された）。というのは、Barnesの出発点は、日本における部族首長社会から天皇国家への移る過程の研究。博士号を得てからBarnesが英国のCambridge Universityに就職した。後に英国のDurham Universityに移った。Barnesの研究は、日本考古学を中心にし、東アジア全域を渡っている。彼女ほど東アジアの考古学研究に貢献した人はいない可能性がある。東アジアの考古学研究を振興・促進するために、1990年にEast Asian Archaeology Network（1994年からSociety for East Asian Archaeology）を設立した。1994年から、Barnesがこの東アジア考古学会の会長として活躍している。このようにBarnesが多くの若い西洋人と日本人の考古学研究者を支援したり育ったりしている。

（重要人物：後輩達）後輩達Bennett、Savage、Stimmel他、Matsui、Weymouthは、HurleyとBleedと一緒に北海道の八木遺跡の調査に参加した。日本人の松井章（奈文研）以外は、考古学者かどうか私は知らない。D'Andreaは、Crawfordの学生で、古民族植物学の研究している。青森県八戸市風張遺跡の調査に参加し、縄文後期・晩期の境に近い時期の遺構から出土した栽培米の種を確認した。

（特役人物）C. Melvin Aikens は北西北米大陸の先史時代と日本の考古学を研究している。Akazawa Takeru（赤沢威）と一緒に研究することがある。縄文人の生活水準の問題をよく取り上げている。いわゆる裕福な民族（affluent foragers）。Prehistory of Japan（『日本の先史時代』、昭和57年[1982]、共：Higuchi Takayasu）、Prehistoric Hunter-Gatherers in Japan: New Research Methods（『日本における先史時代の狩猟採集民族：新研究方法』、昭和61年[1986]、共：Akazawa Takeru）など重要な本や論文の数が少なくない。Prehistory of Japanは、Munro、Groot、とKidderに続いて欧米人による第4の「教科書」といえる。

Brian Stewart Chisholmが古代食性、先史時代の人々の食べ物の復元のために安定同位体分析の研究を行っている。小池裕子と一緒に数多い論文を執筆した。

（幻人物）Henry Stewartが長く日本（日野市）に住んでいる。数回も会ったことがある。が、彼のことを殆ど知らない。

（特殊人物）Betty J. Meggersが南米大陸の考古学の研究者。彼女（Clifford EvansとEmilio Estradaと一緒に）の特殊な考えは、南米大陸の土器起源の「越太平洋説」。というのは、縄文人は船（丸木舟）に乗って太平洋を渡って南米大陸の北西部に住んでいた原住民に土器の作り方を教えた。殆どの考古学者が賛成していない（Lathrap 1967, American Anthropologist, 69; Pearson 1968, American Anthropologist, 70）。しかし、この説を信じている人もいる：Jon Turkの『縄文人の船跡に』（In the Wake of the Jomon、平成17年[2005]）。

（その他の人物）下のとおり。

（一回切り人物）下のとおり。

- （重要人物：先輩達）

1. 故William M. Hurley (昭和49年～昭和56年 [1974~1981])
 国籍：アメリカ、博士号：University of Wisconsin、1970年頃、所属機構：University of Wisconsin, University of Toronto。
 2. Peter Bleed (昭和48年～[1973~])
 国籍：アメリカ、博士号：University of Wisconsin、1973、所属機構：University of Nebraska, Lincoln, U.S.A.。
 3. Gary Crawford (昭和51年～[1976~])
 国籍：カナダ、博士号：University of North Carolina, Chapele Hill、1980年頃、所属機構：University of Toronto, Canada。
 4. Gina Lee Barnes (昭和52年～[1977~])
 国籍：アメリカ・イギリス、博士号：University of Michigan, Ann Arbor、1983、所属機構：Durham University, England (元Cambridge University, England)。
- (重要人物：後輩達)
1. Connie J. Bennett (昭和56年、平成13年[1981, 2001])
修士号：Peter Bleed博士の下University of Nebraska, Lincoln、研究：八木遺跡の考古地磁気探査1981、2001。
 2. Howard Savage (昭和50年[1975])
研究：八木遺跡の動物遺体。
 3. C. A. Stimmel et al. (昭和58年[1983])
研究：八木遺跡の土の化学分析。
 4. Matsui Akira (昭和54年[1979])
研究：八木遺跡の動物遺体。
 5. John Weymouth (昭和53年、平成5年、13年[1978, 1993, 2001])
研究：八木遺跡の研究、Bleed、Hurley、Yoshizakiと共に。
 6. A. Catherine D'Andrea (平成4年～7年[1992~1995])
博士号：University of Toronto,カナダ (平成4年[1992])、所属機構：Department of Archaeology, Simon Fraser University, Canada、研究：古民族植物学、東北日本で平成4年～平成7年、アフリカで平成11年～。Gary CrawfordとYoshizaki Masakazuと一緒に研究した。
- (特役人物)
1. C. Melvin Aikens (昭和54年～[1979~])
 国籍：アメリカ、所属機構：University of Oregon Museum of Natural Science, Eugene, Oregon、研究：北西北米大陸の先史時代と日本の考古学。
 2. Brian Stewart Chisholm (昭和57年～ [1982~])
 国籍：カナダ、所属機構：Univeristy of British Columbia、研究：安定同位体分析による古代食性、先史時代の人々の食べ物の復元、出版物：小池裕子と一緒に数多い論文。
- (幻人物)
1. Henry Stewart
 国籍：アメリカ人で長く日本（日野市）に住んで、日本国籍に帰化して闇に消えた。
貢献：どれほど日本の考古学に貢献したか、私は知らない。もともと、影の薄い人。

● (特殊人物)

1. Betty J. Meggers

所属機構：アメリカのSmithsonian Institution, Anthropology [1997]、研究：南米大陸の考古学。特殊理論：南米大陸の土器起源の「越太平洋説」の持ち主の一人である。

● (その他の人物)

1. Gari Ledyard (昭和50～58年[1975~1983])

貢献：騎馬民族の問題、邪馬台国の謎を挙げている論文を書いた。

2. Anatolii P. Derevyanko (昭和59年[1984])

貢献：『日本の旧石器』（Nauka 1984、ロシア語）という本を出版した。1970年代から日本の旧石器文化に興味をもって、それ以来、時々来日している。

3. T. E. G. Reynolds (昭和59年～平成2年[1984~1990])

貢献：日本の前期旧石器時代の問題に関する数通の論文を書いた（彼は賛成だった）。Gina BarnesとSimon Kanerと一緒に論文を執筆したことがある。

4. Atholl J. Anderson (昭和62年[1987])

所属機構：University of Otago, New Zealand [1987]、貢献：日本の先史時代の考古学の最近の発展の論文を学術雑誌に掲載した。

5. Richard Shutler, Jr. (昭和63年～[1988~])

人物像：南太平洋の考古学研究の元老、所属機構：Simon Fraser University, カナダ、貢献：日本の前期旧石器文化の問題に興味があり、南太平洋にあるVanuatu 国のEfate島から縄文土器が出土したと1999年の論文に掲載した。芹沢長介との友人関係。

6. Wilhelm G. Solheim II (平成元年、6年[1989, 1994])

所属機構：University of Hawaii、貢献：昭和32年（1957）、Asian Perspectives（『アジアからの眺め』？）という学術雑誌を創立した。Chard博士が、その1号から東北アジア地域報告を各号に掲載した。日本考古学に関連する論文が多い雑誌になった。雑誌の19巻1号（1976年）は「日本の先史」の特集。特殊理論：日本における米栽培の起源は、中国の東海岸沿いの海洋民族による説（平成元年[1989]）。

● (一回切り人物)

1. Peter Rowley-Conway (昭和58、59年、平成7年[1983, 1984, 1995])

所属機構：University of Durham, England、研究：欧州の先史時代の考古学、デンマークのErtebølle貝塚の研究で縄文文化に興味を持つようになった。（山内清男先生が、その逆の道を辿った。）日本の考古学に関する論文は一通だけ。

2. W. Andrefsky (s62[1987]), Vaughn M. Green (s53), B. G. Grigorenko (s44), Jacquetta Hawkes (s49), Patricia Hitchins (s53), Michael Hoffman (s49), David Hughes (s62), Cornelius J. Kiley (s48), V. E. Larichev (s45), Z. Roksandic (s63), Irving Rouse (s61[1986]), Chris Scarre (h1), Ruslan S. Vasil'evskii (s56, 57), Douglas Yen (s43), John Young (s33)

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

=====

V. 戦後の人々（平成時代、研究を「現代化」させた人達）：

（*平成年代より平成時代の方がいいと思う）

・重要人物：Fawcett, Habu, Hudson, Edwards, Nelson

・特記・特役人物：Ikawa-Smith (その2)

・その他の人物：Kaner, Hall

(重要人物) Clare Fawcett、Junko Habu、Mark Hudson、Walter Edwards、Sarah Nelsonの5人はよく一緒に研究したり、発表したりする。研究課題は、Nelson以外は日本の考古学の色々(Nelsonは韓国の考古学)。しかし、昭和60年頃から、この5人とも国家主義(ナショナリズム、nationalism)、民族像・民族意識(アイデンティティ、identity)、民族起源(ethnogenesis)、性別意識(ジェンダー、gender)などの課題を挙げている論文や本が少なくない。それは「現代化」をすることとなる。また、「ポストモダン派の後現代批判理論」(postmodern critical theory)でもある。平成10年ごろから、Fumiko Ikawa-Smith(参照:上のIII、昭和30年代~)も、この5人と一緒に国家像・国家意識(national identity)や考古学における性別意識(ジェンダー)の課題をよく挙げている。

1. Clare Fawcettの刊行物の題名:

- ・「考古学における同一化の政治的問題」(昭和61年[1986])
- ・「日本における考古学の社会・政治的状况の研究」(平成2年[1990]、博士論文)
- ・「国家主義と戦後の日本考古学」(平成7年[1995])
- ・『国家主義、政治、と考古学活動』(平成7年[1995]、編集者)
- ・「日本における考古学方法と日本人の民族像」(平成8年[1996]、Hudsonは編集者)

1-2. Clare FawcettとJunko Habuの共同刊行物の題名:

- ・「日本における教育と考古学」(昭和61年[1986]、学会発表)
- ・「日本における教育と考古学」(平成2年[1990]、学術雑誌の論文)
- ・「縄文の考古学と日本人・日本文化起源の表しかた」(平成11年[1999])
- ・「日本考古学におけるMarxism(マルクス主義)理論と遺跡分布の研究—Gordon Childeの直接的と間接的影響」(平成16年[2004])

2. Junko Habuの刊行物の題名:

- ・「現代日本考古学と社会」(平成元年[1989])

3. Mark Hudsonの刊行物の題名:

- ・「東アジアにおける民族像—和への理解(Approaches to Wa)」(平成元年[1989])
- ・『多文化的日本、旧石器時代から現代まで』(平成8年[1996])
- ・『民族像の破滅—日本列島における民族起源』(平成11年[1999])
- ・「庶民のために、庶民の手で—戦後の日本の考古学と前期旧石器時代の捏造問題」(平成17年[2005])
- ・「人ではなくて土器—民族性(民族精神)、文化と民族意識」(平成17年?)

4. Walter Edwardsの刊行物の題名:

- ・「卑弥呼を説明すること—3世紀の日本女王に関する歴史学研究における性別意識の前提(複数)」(昭和61年[1986])
- ・「国際化、日本人論と日本人の民族意識問題」(平成元年[1989])
- ・「埋葬された論説—登呂考古学遺跡と戦後初期の日本国家・民族象」(平成3年[1991])
- ・「日本の新しい過去—百年間分の考古学が日本の神話過去を消散させた」(平成9年[1997])
- ・「裂けていない家系の塔—天皇稜と日本の国家主義」(平成15年[1999, 2003])
- ・「戦われた立ち入り—戦後の天皇稜」(平成12年[2000])
- ・「聖戦のための伝統作成—宮崎県、八紘一宇の塔と日本の戦時中の信念」(平成15年)

[2003])

5. Sarah Nelsonの刊行物の題名：

- ・「性別（ジェンダー）階級と新羅の女王たち」『性と性別（ジェンダー）階級』、Barbara D. Miller編集（昭和63年[1988]）
- ・『考古学における性別意識（ジェンダー）』（平成9年[1997]）
- ・「シンポジウム：アジア・太平洋の考古学における性別意識（ジェンダー）」（平成10年[1998]、Nelsonは担当者、Ikawa-SmithとHabuは発表者）
- ・『性別意識（ジェンダー）を追い駆ける—全世界の考古学方法から見て』（平成14年[2002]）

（特役人物）

6. Fumiko Ikawa-Smithの刊行物の題名：

- ・「東アジアにおける国家像の作成と（民族・文化）起源—比較論」（平成11年[1999]）
- ・「日本の考古学における性別意識（ジェンダー）」（平成14年[2002]）

6-2. Fumiko Ikawa-SmithとJunko Habuの共同刊行物の題名：

- ・「考古学的情報と解説作業における女性の参加度—日本の場合」（平成10年[1998]）

Mark Hudsonの『多文化的日本』に関するある書評の言葉：「この論文集は史料、考古学情報、言語学と後現代批判理論（postmodern critical theory）という強い道具を用いて（日本の考古学者の）現代単一文化国家主義信念を破壊する（modern nationalistic ideology of a monocultural Japan）」。他の書評の言葉：「この本が単一文化・純一民族の日本の社会という一般の考えを反駁している」。この本は、Hudsonが編集し、Hudson、Fawcett、Kaner、Maher（言語学者）、Pearson他が論文を掲載した。

Mark Hudsonの博士論文『民族像の破滅—日本列島における民族起源、紀元前400から紀元後1400まで』（平成8年[1996]、後単行本、平成11年[1999]）は、オーストラリア国立大学とオーストラリアのアジア研究会に「オーストラリアの1996年の一番勝れている博士論文」と褒められて両者から賞をもらった。しかし、C. Melvin Aikensが、この本の内容を一般的に褒めながら、Hudsonの「民族像の破滅」の考えを厳しく批判する：「数多く西洋人学者（Hudson含めて）が慢心で自分の考えがより非感情的な考えであり、より正しい考えでもあるが、日本人の普通な考えが単に国家主義の幻覚である、と彼ら思っている」（Asian Perspectives, 39: 194-196, 2000）。言い換えれば、Hudsonの「民族像の破滅」の考えが「白人の傲慢である」と言える。

（その他の人物）Simon KanerとMark Hallは、上の5人（1~5）の友人であるが、研究で取り上げている課題・問題は考古学研究の主流にある。

●（重要人物）

1. Clare Fawcett（昭和61年～[1986～]）

博士号：McGill University、1990、所属機構：カナダのSt. Francis Xavier University、研究：日本考古学の社会・政治的状況、他。

2. Junko Habu（昭和61年～[1986～]）

博士号：McGill University、所属機構：University of California, Berkeley、研究：縄文、特に、諸磯期の生活様式、重要単行本：Ancient Jomon of Japan（『縄文時代の日本』、平

成16年[2004])。これは非常に勝れている本。

3. Mark Hudson (平成1年～[1989～])

博士号：Australian National University、1996 (?)、在日期間：平成9年～(1997～)、平成元年(1989)東京大学留学生、所属機構：つくば大学 (2006) (1997岡山大学)、研究：日本の考古学色々、特に民族像の問題に興味がある。

4. Walter Edwards (昭和58年～[1983～])

博士号：Cornell University、1984、在日期間：平成5年～(1993～)、それ以前数回研究のために来日、所属機構：天理大学、研究：古墳時代・古代、遺跡・古墳の探査、古墳の発掘調査。

5. Sarah Nelson (昭和50年～[1975～])

博士号：1973、所属機構：University of Denver、研究：朝鮮半島の考古学研究を昭和50年(1975)から行っている。ジェンダーは、昭和63年(1988)から挙げている。

● (特役人物)

1. Fumiko Ikawa-Smith (その2)、所属機構：McGill University、研究：平成10年から性別意識 (ジェンダー) と国家像の問題をよく挙げている。(参照：上のIII)

● (その他の人物)

1. Simon Kaner (昭和61年～[1986～])

修士号：Cambridge University 1988、博士号：Cambridge University、2004、所属機構：副所長Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Culture, United Kingdom (セインズベリー日本藝術研究所)、研究：縄文文化、貢献：縄文文化を世界に紹介する小林達雄先生のJomon Reflections (2004) を翻訳し、日英の文化財・考古学の交流のために努めている。

2. Mark Hall (平成11年～[1999～])

所属機構：新潟県立歴史博物館とUniversity of California, Berkeley (Junko Habuは同大学の教員)、研究：土器粘土の科学的分析、Junko Habuと共同で縄文土器粘土分析を行っている。日本以外の地域を出土した土器の粘土分析もする。

=====
=====

VI. 平成時代の新人たち

・重要人物：Bausch, Wilson

・特記・特役人物：Kuzmin

・その他の人物：Brúchert, Ferroni, Fredrick, Higgs, Kaufman, Lee, Naumann, Oksbjerg, Seyock, Twiss, Vasilevski

平成時代の新人たちの業歴は浅いから、今のところ何も重要なことを言えない。知っているのは、以下のとおり。

● (重要人物)

1. Ilona Bausch (イローナ・パウシュ) (平成6年～ [1994～])

国籍：オランダ (?)、修士号：Leiden University、オランダ、1994、博士号：Department of East Asian Studies, Durham University, イギリス [2003 or 2004]、研究：中部・日本海の縄文の石材交流、縄文土偶、所属機構：Leiden University, オランダ

[2006]

2. Richard L. Wilson (平成5年～[1993])

国籍：アメリカ、在日期間：平成5年～[1993~]、所属機構：東京都基督教大学（Kidderの世継ぎ）、研究：江戸時代・明治時代の陶器・磁器、貢献：発掘調査の団長、報告書の編集、日本の陶器・磁器に関する本の出版、など。

- (特記・特役人物)

1. Yaroslav V. Kuzmin (平成13年～[2001~])

国籍：ロシア、研究：東北アジア・日本の最古の土器の測定年代。ロシア極東は昭和63年以前から、日本は平成13年から。最近、ロシア極東と日本における最古の編布（アンギン）の研究を行っている。重要出版物：Keally, Charles T., Yasuhiro Taniguchi, and **Yaroslav V. Kuzmin**. 2003 Understanding the Beginnings of Pottery Technology in Japan and Neighboring East Asia. *The Review of Archaeology*, 24(2): 3-14. (in English)。

- (その他の人物)

1. Jane Oksbjerg (平成18年[2006]) (ジェーン・オクスビエルグ)

研究：「弥生時代絵画にみるコスモロジーの退化—弥生時代中期後半における偶像打破—」、所属機構：University of London, United Kingdom。

2. Devena Higgis (平成18年[2006]) (デヴォーナ・ハギス)

国籍：オーストラリア、所属：つくば大学研究生、研究：パブリック考古学（public archaeology：公衆考古学・公共考古学・公の考古学・民衆考古学・大衆考古学）

3. Lorenz W. Brúchert (平成4年[1992])

国籍：カナダ（?）、論文：「日本の前期旧石器時代にもっと古い年代」

4. Elisa Ferroni (h18), Wendy Fredrick (h16), Dawn Kaufman (h16), Lee Gyoung-Ah (h9), Nellie Naumann (h12), Barbara Seyock (h16-18), Katheryn C. Twiss (h13), A. A. Vasilevski (h15)

=====
=====
VII. 平成時代の元老達と大先輩達

- ・元老達：Kidder, Ikawa-Smith, Pearson
- ・大先輩達：Crawford, Barnes, Bleed, Chisholm, Aikens

- (元老達：上のIII、昭和30年代～)

J. Edward Kidder, Jr.は『古法隆寺とその時代』（1999）、85歳でも『卑弥呼と邪馬台国とその謎』（2007）を出版した。

Fumiko Ikawa-Smithは平成14年（2004）、アメリカの考古学協会（Society for American Archaeology）の第69回年次総会で日本の前期旧石器捏造問題のシンポジウムを担当した。参加者は5人の日本人と3人の欧米人（小林達雄、小野昭、矢島國雄、佐川正敏、白石浩之、Fumiko Ikawa-Smith、Gina Barnes、Peter Bleed）。Ikawa-Smithまだ活発的に活躍している。

Richard Pearsonは最近『国際縄文協会紀要』第1号（2004）の編集者として勤めた。69歳で、この3人「昭和30年代からの再開拓した人達」の中で一番若い、まだ元気で活躍している。

- (大先輩達：上のIV、昭和40年代～)

Crawford, Barnes, Bleed, Chisholm, Aikensの5人はまだ50歳代で現役の大学教員。

VIII. 在日米軍基地内 (US Forces Japan Bases) (戦後、昭和20年代～)

- ・重要人物：MacCord, Kunkel, Glumac
- ・特記・特役人物：Knepper, Segawa, Nagao, Defend, Anderson
- ・その他の人物：Allen, Nees, Haun, Henry, McNeill, Welch, Bouthillier

米国の文化財保護法は、1995年ごろ変わった。この改善された法律によると軍の基地内もう聖域として扱われなくなった。これから国内でも国外でも軍の基地内の文化財を米国や当所の文化財保護法に従って「保護しなければならない」ことに成った。文化財保護のために調査し、5年間の『総合文化資源管理指針』(Integrated Cultural Resources Management Plan)を制作する。(米国では、「文化財」ではなくて「文化資源」と言う。)しかし、1995以前から在日米軍基地内の文化財・考古遺跡の調査が行われていた。

(青森県三沢基地)戦後間もなく(昭和20年代前半 [1948~1950])、三沢基地内と基地周辺の遺跡の発掘調査は、米陸軍建設部のHoward A. MacCord少佐と彼が雇った数人の日本人が行った。MacCord少佐は、その結果をアメリカの考古学雑誌に発表した(MacCord 1955a, 1955b)。かつ、発見された遺物は、今でもアメリカの国立博物館(Smithsonian Institution)に展示されている。MacCord少佐が5～6遺跡を記録した。1971年、三沢市が踏査した。その結果は、新しく4～5遺跡が追加された。

その後、1978~1983(昭和55年前後)、三沢基地内にある大学の先生、Peter H. Kunkel博士が、大学の学生と一緒にMacCord少佐が登録した遺跡を再調査した。この発掘調査のためにKunkel博士が地元の考古学者や青森県の考古学者との連絡をよく取った。その間に、基地の建設部のJames H. Anderson大尉が基地の壁沿い数ヶ所の遺跡を確認した。工事の予定のために、Anderson大尉の一ヶ所の遺跡が1982年に野辺地町の考古学者Segawa Shigeru(瀬川滋)さんに発掘された(Segawa 1985)。これは三沢基地内の初めての緊急・事前考古学調査だった。次の年、1983年にSegawaさんがMacCord少佐とKunkel博士が調査した一つの遺跡を発掘した。しかし、1985年に基地の北部に広い面積の住宅工事の予定があることが分かったから、Kunkel博士が三沢市に連絡して予定地に遺跡があることを確認した。市は防衛庁に連絡したところ工事の事前発掘調査する様になった。そのことで基地の司令官が怒ったからKunkel博士は大学に辞めさせられて韓国に引っ越した。しかし、青森県が次の年にその遺跡の発掘調査を行った(Aomori-ken 1988)。また、同じ年に青森県が基地内の他の遺跡の発掘調査も行った(Aomori-ken 1989)。三沢市も1986年に別の2ヶ所の遺跡の調査を行った。

約10年後、1997年(平成9年)に、アメリカの文化財保護法の改善の結果として、アメリカ人の考古学者Petar Glumac博士が三沢基地内の発掘調査の担当者・団長になった。調査団は、主任調査員のDennis Knepperさんと他に4名のアメリカ人調査員で形成された。Glumac博士が基地の意見をよく聞きながら三沢市の意見もよく聞いた。その上、市の考古学担当者、Nagao Masayoshi(長尾正義)さんを調査現場に招いて調査のやりかたと出土遺物のことを相談した。また、MacCord少佐(退軍大佐)は、まだ健在でGlumac博士が彼の協力も得た。調査の結果として、3ヶ所の新しい遺跡を確認して、2ヶ所の遺跡の面積は思ったよりかなり広いことも確認した。

Glumac博士とKnepperさんの調査団が、また2000年に三沢基地内の工事予定の事前調査を行った。その結果は、建物の建設予定地は遺跡で、野球所の建設予定地は遺跡外れで。米軍がその結果に基づいて予定を変更して建物を遺跡外れの所に移し、遺跡の上に盛土を敷いて野球所を

作った。Glumac博士と数人のアメリカ人の考古学者が、2002年と2004年にまた三沢基地内の遺跡調査を行った。

今のところ、三沢基地内の遺跡数は、MacCord少佐が見つかった6ヶ所から18ヶ所まで増えた。かつ、Kunkel博士とGlumac博士のお陰で、最近、三沢市（長尾さん）が殆どの事前調査を行っている。

Glumac博士たち（アメリカ）の調査方法は5段階で行われている。

1. 文献調査
2. 踏査
3. Phase I -- STP試掘調査
4. Phase II -- 試掘調査
5. Phase III -- 全面発掘調査（=総面積の10%）

殆どの場合に、文献調査、踏査、Phase I STP試掘調査の順で行い、報告書を書いて、それ以上の調査をしない。時々、Phase II 試掘調査を行う。Phase III 全面発掘調査を滅多におこなわない。今のところ、三沢基地内でPhase III調査は行われていない。

三沢米空軍基地内の遺跡発掘調査の主役はMacCord、KunkelとGlumacである。Glumac博士を支えたのはKnepperである。MacCordは学術雑誌に論文2通を掲載したが、Glumac・Knepperは今のところ米軍への報告書以外、考古学界への論文を掲載していない。Kunkelは瀬川滋さんが書いた『小山田遺跡』（昭和60年 [1985]）に一通の論文を掲載してある。

（青森県三沢基地関連天ヶ森爆撃場 Ripsaw Range）Glumac博士とKnepperさんの2000年の調査団が三沢市の北端にある爆撃場内でPhase I STP試掘調査も行った。戦前から知られていた鷲森1遺跡の位置を確認し、新しくこの周辺で珍しい縄文晩期の遺跡も確認し、例外としてPhase II試掘調査も、その時に行った。

（東京都横田米空軍基地）Glumac博士とKnepperさんが、他の4人の調査員で、1997年に福生市にある横田基地でPhase I STP試掘調査を行い、選定歴史的建造物の写真記録と評価も行った。埋蔵文化財を確認できなかったが、17世紀と19世紀の瀬戸美濃磁器の破片数点を見つけた。戦時中の建造物の保存ができなかった。

（東京都多摩サービス補助施設）Glumac博士とKnepperさんが、他の4人の調査員で、1997年に稲城市・多摩市をまたがる多摩サービス補助施設内の稲城市にある部分でPhase I STP試掘調査を行い、選定歴史的建造物の写真記録と評価も行った。戦争の時に1ヶ所の遺跡が確認されたが、Glumac博士たちの調査結果で稲城市の遺跡の数が9ヶ所増えた。施設の多摩市の部分はゴルフ場であるが、踏査を行って2ヶ所で縄文土器数片が拾われた。東京都多摩サービス補助施設は、戦時中には、多摩火薬製造所であって、当時の建造物の保存状態がまた良好で、歴史建造物として保存する方針。

（横田基地付属地理的離施設）横田基地が数ヶ所の地理的に離れた施設を管理している。いわゆるYokota Air Base Geographically Separated Units。2000年に、この9ヶ所の施設に文化財の有無文献調査が行われた（Defend他2001）。調査方法は、当県や市町村の文化財担当者に電話連絡し、相談の上に資料をもらって文献調査を行うことにした。施設に遺跡があるかどうかを確認して、なくても、施設から2 km範囲内にある遺跡から施設内の遺跡存在の可能性を検討した。調査された施設は次のとおり：

（東京・埼玉）

1. Tokorozawa Transmitter Site, 所沢市
2. Owada Communications Station, 新座市・清瀬市
3. Momote Annex, 和光市
4. Fuchu Communications Station, 府中市
5. Yuki Radio Relay Site, 八王子市
(西日本)
6. Sofu Communications Station, 岩国市祖生
7. Seburiyama Radio Relay Site, 佐賀県脊振村脊振山
8. Itazuke Auxiliary Airfield, 福岡市板付
9. Tsushima Communications Station, 長崎県対馬島巖原町 (Izuhara-cho)

同じ時に、これらの9施設の環境保護のためにも調査が行われた。特にOwada Communications Station (新座市) で木の伐採の計画があって新座市の環境部とよく相談した。他の8ヶ所の施設で普通の踏査を行った。

(米海軍の佐世保基地) 1997年にAlan E. HaunとKatharine Bouthillierが米海軍の佐世保基地と関連施設の文化財調査を行った (Haun & Bouthillier 1998)。5年後、2003年に、Glumac博士が佐世保基地とその関連施設の文化財の再調査を行った。この調査は文献調査と踏査だけだったが、その結果の一つは日本軍が建設した古い建物が保存された。調査された施設は、佐世保基地、Akasaki POL Depot, Hario-shima Ordinance Storage Area, Hario Village, Iorizaki POL Depot, Maebata Ordinance Storage Area, Sakibe Training Area, and Yokose POL Depot。先史時代の遺跡は殆どなかったが、一つの施設には江戸・明治の集落と二つの墓地の跡があって、もう一つの施設に中世の城の遺構がある可能性が確認された。

この調査のために、Glumac博士が基地の責任者と相談し、その後直ぐ佐世保市の文化財担当者と2、3時間相談した。また、1日かけて、長崎県庁の文化財担当者たちと相談した。Glumac博士が非常に礼儀正しい人。

(沖縄の米軍基地) 2004年にGlumac博士が沖縄本島にある米軍基地内の文化財調査を行った。この調査は文献調査と踏査だけだった。しかし、それ以前、他のアメリカ人考古学者(複数)が数施設内に調査を行った (Allen & Nees 1998; Haun & Henry 1998; Welch & McNeil 2002)。この調査の結果は、ある程度、学術雑誌に掲載されてある (Allen 2003; McNeil & Welch 2003)。それ以外のことは、この6人について何も知らない。

● (重要人物)

1. Howard A. MacCord (昭和23年~25年、昭和30年 [1948~1950, 1955])、三沢米空軍基地。
2. Peter H. Kunkel (昭和53年~60年 [1978~1985])、三沢米空軍基地。
3. Petar Glumac (平成11年~ [1999~])、青森県三沢米空軍基地、青森県三沢基地関連天ヶ森爆撃場 Ripsaw Range、東京都横田米空軍基地、東京都多摩サービス補助施設、長崎県米海軍佐世保基地、沖縄本島の米軍基地 (複数)。

● (特役人物)

1. Dennis Knepper、Glumac博士の主任調査員。青森県三沢米空軍基地、青森県三沢基地関連天ヶ森爆撃場 Ripsaw Range、東京都横田米空軍基地、東京都多摩サービス補助施設。
2. Segawa Shigeru、(瀬川滋) 青森県野辺地町の考古学者、青森県文化財保護指導員 (考古学)。1980年代でKunkel博士を手伝った。

3. Nagao Masayoshi、(長尾正義) 青森県三沢市の考古学担当者。Glumac博士と協力し、最近、三沢基地内の発掘調査を行っている。
 4. Beth Defend、自然環境・文化財の保護のために現地調査、評価と方針の報告書を作成した。横田基地付属地理的離施設。
 5. James H. Anderson、青森県三沢米空軍基地の建設部の大尉。1980年代で基地内の遺跡を探し、Kunkel博士を手伝った。
- (その他の人物)
(長崎県佐世保米海軍基地)
1. Alan E. Haun, senior archaeologist, Paul H. Rosendahl, PhD, Inc., Hilo [1998] (考古学者)。
 2. Katharine Bouthillier, Architectural historian [1998], U.S. Fleet Activities, Sasebo (建築史学者)。
(沖縄の米軍基地)
1. S. Jane Allen, AMEC Earth and Environmental Services, Honolulu [2003], Camp Foster, Chatan-cho and Ginowan-shi, (Ogden Environmental and Energy Services, Honolulu [1998])。
 2. Judith R. McNeill and David J. Welch, International Archaeological Research Institute, Inc., Honolulu [2003], US Marine Corps Camp Kinser, Urasoe City。
 3. R. C. Nees (with S. Jane Allen), Camp Foster。
 4. (Alan E. Haun and) J. D. Henry, Paul H. Rosendahl, PhD, Inc., Hilo [1998], Camps Courtney, Hansen, and Schwab, Marine Corps Base Camp Smedley D. Butler。

=====

=====

IX. その他の学者

Physical Anthropologists (形態・自然人類学者)

C. Loring Brace, W. W. Howells, A. Kozintsev, Pete E. Lestrel et al., Jane Oksbjerg, Nancy Ossenbergl, Michael Pietruszewsky, Christy G. Turner II

Linguists (言語学者)

B. Lewin, John C. Maher, Sammuell E. Martin, Roy Andrew Miller, J. Petrie, J. M. Unger

Other Scholars (他の学者)

Matsuo Tsukada, Linda E. Heusser & Joseph J. Morley